

堀田上野介正信阿波國領主松平淡路守綱成へ御預け置の所、嚴有公本月八日薨御の儀相聞候へば、延寶八年五月二十日禁錮の内にて鉸を以て自盡、遺書一通如左。其日の番人不殘切腹被申候事。遺書に云。

私儀二十一年以前、乍憚以書付寸志申上候處、御取上も不被遊、上意の上如何様にも可被仰付に、御用捨と被仰出候。其後四年以前、勿論是非に一命差上候覺悟にて、八幡宮、清水寺へ參詣仕、其後修理大夫方迄言上仕候様にと申遣候へば、早速達上聞不届に被思召候得共、父加賀守筋目有之者と被思召との御意にて、又候哉一命御助被遊、阿波守へ御預被成、重疊御重恩難有奉存候。其節於若州上使土岐十左衛門殿へ如申候、命差上罷在候間、何れの道にも同事に存候。乍然身の爲少も命持申度心得無御座候得共、遠國にて成とも暫存命、奉伺御機嫌候段、難有奉存候旨申上候。結局切腹も被仰付被下候はば、忝可奉存候得共、從上御用捨の上御訴訟申上候はゞ、不足の心得も持候様に有之、慮外に可罷成と存じ今日迄存命仕、淡路守方より毎度御機嫌の御様休、奉承知罷在候。向後伺御機嫌不申候ては、存命無

詮事に候條絶命仕候。御勘氣にて罷在ながら、尤御供など存心底は無御座候。萬一か様に申處は、近年追腹御法度故、子孫かばひ候かと不知者は評判も可申候哉。御用捨の上子孫共上候へば、彌以相叶冥慮儀、大望至極成仕合に候得共、御科御赦免不被遊候に御供は、背道理申却て無禮に存候。只無用の命故に相果候迄に候。何とぞか様の躰にても、國端に不慮成儀も出來、御奉公に一命差上不申事、時節と申ながら残念に存候。日頃の所存は天道に御座候間、末々可被聞召候。

右紙面之趣、御老中へ被仰達可被下候。以上。

延寶八

五月二十日

堀田上野介

松平淡路守殿

同七月十九日、淡路守綱矩閉門被仰付候。先年堀田上野介正信有故て養父阿波守綱通へ御預の處、今年嚴有公薨御の後、正信自殺爲致候事、無調法の至に候。御法事等にて御用繁御延引被成候旨被仰渡候。

一、延寶八年の兇事

延寶八年庚申の歳は、大凶事前代未聞也。後水尾帝崩御・女

院崩御・嚴有公薨御・日門知門薨御・院の女御・新院の女御薨御。嚴有公御法會中、内藤和泉守亂心にて、永井信濃守と喧嘩に付切腹。堀田上野介正信自殺。其餘病死は無際限候。十一月尾州野間の内海海水變紅。三月五日奥州宇多郡加佐古浦湖海、海上變紅湖水甚臭。正月十八日薩州鹿島城下災火數千軒、非常の災にて焚死人六十四員。越後國紅雪降。大坂天滿橋下より白氣起る。八月二十三日常憲公即位の禮あり、世俗是を將軍宣下と云。勅使・法皇使・本院使・新院使・女御使皆來會す。是月十九日後水尾帝崩御。二十一日に計音有之候得共、天使も殿中も未聞趣にして禮式執行はる。敕使は花山院前大納言定誠・千種前大納言有能。法皇使は池尻中納言共孝也。可謂有入心者哉。是日散樂興行の内、有野雞飛鳴於厨内也。可謂天災地變人妖皆至焉。

一、老中の小謠

天和元年春、牧野備前守成貞の第へ、老中不殘、若年寄、御側衆等饗應の事あり。其席にて稻葉美濃守正則小謠を諷へり。大久保賀州忠朝・堀田筑州正俊・板倉内膳正重通も相和

して皆謠ふ。世上にて老中の音曲前代未聞の事と云。

一、聖堂落成に就き諸侯獻納品

元祿四年東都聖堂落成の後、諸侯獻納如左。

四書大全・五經大全・性理大全 兼

甲府中納言綱豊

二十一史 五十巻

尾張大納言光友

十三經註疏 二十巻

紀伊大納言光貞

和史七郎 舊事記。古事記。日本記。日本後記。日本三代實錄。文德實錄。

水戸中納言光國

溫公通鑑

松平謙岐守頼常

五經集傳・四書集註・樂疏・家禮節儀

松平左京大夫頼純

朱子語類 朝鮮本・朱子年譜・二程全書

松平攝津守義行

大學衍義補・玉烟堂法帖・通鑑少微

松平出雲守義昌

邵子全書・皇王大記・五朝言行錄

松平播摩守頼隆

孔聖全書・群書治要

松平大和守直矩

通鑑綱目

松平出羽守綱近

陳氏禮書・孔廟禮樂考

松平若狹守直明

太平廣記・太平御覽・燈籠二・水石一座

本 藩

文苑英華 冊府元龜

太平御覽

薩摩 侯 綱 貴